

這って群生するように見えるミヤマカンスゲ *Carex multifolia* Ohwi

図1 生育状態



図2 花序(全体・上部)

図3 雌小穂

《手順1》筆者の参加した5月中旬のバス観察会では、コースのいたるところで雄しべの葯をブラシ状に目立たせた同一種と思えるカヤツリグサ科スゲ属植物を行く先々でみかけた。同行の方々から何スゲですか？と聞かれ、日頃フィールドでみているものではないため答えられず、「おそらくミヤマカンスゲの類だと思います」としておいた。ミヤマカンスゲは普通は叢生するスゲで、変種として這うタイプもあるがまだみたことがなく、本植物はそのあたりの種類と考えていた。花穂は持ち帰ったものの果胞がまだ若く、帰宅後も同定には至らなかった。

《手順2》他にも気になる植物があったため、6月中旬に現地を再度訪れた。成熟した果胞を採集し、次に地下茎を調べると地上にも地中にも匍匐枝と呼べるものではなく、地下部はゆるく伸びて短く這い、年数を経るうちに図1のような広がった集団になっているものと考えられた。スゲ属植物ではメアオスゲがやはりこのような性質を多少もっているが、これほど顕著ではない。

《手順3》帰宅後に果胞を精査。ミヤマカンスゲ近似種と推察していたため図鑑による花序や小穂の総合合わせでおおよそ本種と判断。なお、最初から調べる場合は文献などの検索表を用いると以下のような手順となる。

這って群生するように見えるミヤマカンスゲ *Carex multifolia* Ohwi

(節の検索)

・小穂は雌雄2形あり、頂小穂♂1・側小穂♀複数の構成 → 柱頭は3岐(必須キー) → 果実の柱基は変形している(必須キー:面倒だが生時の果胞を破くと確認できる) → 果胞は長さ5mm以下 → 『ヌカスゲ節』となる。

(ヌカスゲ節の種の検索)

・果実頂部の柱基は小鍰状 → 葉幅は5mm以上で常緑 → 雌小穂は細い柱状で果胞はやや疎らにつく → 果胞の口部は微2歯 → 葉は柔らかく少しざらつく → 基部の鞘はほとんど細裂しない → 【ミヤマカンスゲ】類に至る。

なお、信頼できる資料としては、近くの図書館などでもよくみかける勝山(2005)が、現在最も使いやすく薦められる。

《手順4》匍枝がないことをふまえて果胞や小穂を検証すると、変種や類似種ではなくミヤマカンスゲそのものと判断し、勝山(2005)にも放射状に広がる個体の例が示されていたことから、本種と同定した。(2012/7/5 山口純一)

参考資料: 勝山輝男 2005. 日本のスゲ, 375pp. 文一総合出版.